



地域とのつながりを大切にする防災教育

学校名 唐津市立湊小学校

佐賀県唐津市湊町1291番地2

I 学校の概要

1 学校の規模（平成25年5月1日現在）

児童数	144名（男子71名 女子73名）
学級数	8学級
職員数	21名

2 地域環境

湊地区は、唐津市の中心部から北西へ1.2kmほどの距離があり、唐津の西北端の白砂青松の海岸線に位置する。玄海国立公園の一画を成し、中でも七ツ釜や立神岩は景勝の地として有名である。夏場は、北浜海岸での海水浴や森林浴、立神岩周辺でのサーフィンでにぎわう。（立神岩は、九州サーフィンの発祥の地と言われている。）冬場でも、玄海灘から吹き付ける強い風と荒波が、自然の厳しさ・偉大さを感じさせてくれることから、訪れる人も少なくない。

また、湊の相賀岬北方の海上600mには神集島（周囲1.4kmの三日月状の島）が位置する。定期便で約7分のところである。神集島中が平成16年度に湊中と、神集島小が平成23年度に湊小と統合したので、現在、神集島の児童・生徒は、定期便を利用しながら通学している。夏場は台風による高波、冬場は玄海灘の荒波により、定期便が欠航となることがある。気象状況を絶えず気遣いながらの通学である。

このように、湊小校区は海に面した地域で、湊小学校は海岸線から500mほどしか離れていない。ただ、学校は海拔6～7mほどのところに建っているため、よほど大きな津波でないかぎり学校まで到達することはないだろうという考えをもつ人は多い。

II 取組の概要

1 防災に関する指導方法等の開発・普及等のための支援事業

この事業においては、これまで本校で行ってきた防災に関する指導方法・内容を充実させることが、その開発・普及につながるという考え方で取り組んでいる。

本校では例年、救急救命講習会、着衣泳教室、防災避難訓練（火災、大雨、地震・津波）、防災センターの見学、理科・社会科での災害防止の授業等を実施しているが、ここでは、着衣泳教室と地震・津波避難訓練の取組において報告する。

(1) 着衣泳教室 …… 7月9日

海上保安庁や水難救済会の指導を受けての着衣泳教室は今年で4年目を迎えた。児童の中には、「浮いて待つ」という言葉が定着しつつあり、水の事故にあった時は、とにかく浮いていることができれば助けてもらえるという意識は高まってきている。ただ、背浮きをすることの技能が十分に身につけているわけではない。





そこで、今年特に配慮したことは、着衣泳での「背浮き」についての事前指導である。それは、既に経験している子どもたちなので、教室での事前指導の時に、ペットボトルを手にして「背浮き」体験を思い起こさせたことである。中には寝転んで練習する子もいた。

些細なことのようにだが、結果としては、指導者の方から、「こんなにたくさんの子が『背浮き』ができるなんて初めての学校ですよ。」と驚きの声をいただいたほどであった。これは着衣泳教室を4年間継続してきたからの結果かもしれないが、「背浮き」体験を想起させ、余裕をもって着衣泳に臨ませたことがよかったのではないかと考える。

(2) 地震・津波避難訓練 …… 9月13日

ア 訓練の概要

一口に地震・津波といっても、さまざまな状況が考えられる。その考えられる状況によって訓練の形は変わってくる。湊小学校は、海拔6～7メートルで、津波の規模によっては校舎の2階、3階に避難した方が二次被害を防ぐ面からより安全ということも考えられる。しかし、今回は、津波の場合は「より高いところに、とにかく逃げる。」ということと「保護者への引き渡しを確実にを行う。」このことを、児童、保護者、地域の方と一緒に確認した。訓練の実際としては、



- ① 地震ありの放送で机の下に隠れ、机の脚を対角線上にもつ。
- ② 津波の恐れありということで、メガホンによる高台避難指示を各階に伝える。(停電を想定して)
- ③ 級外が、非常持ち出し袋をもち運動場集合場所へ向かう。
- ④ ここで児童の人数確認ができたクラスから随時避難場所へ移動する。
- ⑤ 全員の人数確認を終えたら職員も避難する。(各階の見回りを終えた職員が途中で合流)
- ⑥ 高台の避難場所(海拔40m)で人数を確認する。その後、到着した保護者へ引き渡しを行う。
- ⑦ 引き渡しでは、「子どもは学年ごとに並び、勝手に動かない。各担任が学年カードを高く挙げ、保護者に学年の場所を知らせる。保護者は担任と確認をとって児童を引き取っていく。(兄弟姉妹がいても確認は一人ずつ。)担任は、児童名簿で引き渡し児童をチェックする。」という方法をとった。

【補足】

- ① 参加者は、児童144名、職員21名、消防団14名、区長代表者1名、保護者70/98名
アドバイザー(佐賀地方気象台2名)
- ② 校舎外へ3分以内、高台避難場所へ歩いて7、8分 …… 10分以内でできた。
- ③ 今回持ち出した非常用持ち出し袋には、メガホン5個、ラミネートをかいた各学年の児童名簿(兄弟姉妹の名前、住所・電話番号も記載)と油性ペン8本が入っている。今後、ラジオを入れられればと思っている。普段は、職員室出入り口横に置いたダンボール箱の中に入れ、誰でもいつでも持ち出せるようにしている。地震・津波に限らず、避難時にはいつも活用する。担任不在の場合は、代替職員がこの名簿をもとに対応する確認をとっている。



イ 児童の様子や活動を振り返って

- ① 少しの高台でも、実際に避難してみると結構大変だと実感した児童が多く、他の訓練との違いを体感できたことはよかった。

② 消防団の方には、今回は見守りを中心として、避難場所までの要所、要所に立っていただいた。消防団の方々の顔を覚えるだけでも意味があると思っていたが、消防団の方々の真剣な様子に、命を守ることの訓練の大切さを感じたり地域の方々から大事に見守られていると感じたりした子も多かったのではないかなと思う。



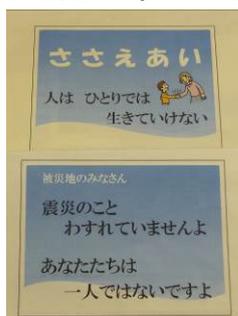
③ 避難訓練の後、消防団の方からは、子ども達に、すばやく整列や先生の指示で動くなど大体上手だったが、緊張感をもって臨むという点ではまだまだといった話があった。また、气象台の方からは、まさかのときにこういった訓練が、他所に行ったときでも、高台に逃げたり、かばんで頭を守ったり、ブロック塀等から離れたりとといった身を守る行動につながる。家族で避難場所を2, 3箇所決めておくようなことも大事といったことを児童に話された。



2 災害ボランティア活動の推進・支援事業

(1) 支え合うことの大切さに目を向ける全校集会 …… 7月1日

東日本大震災を題材にして、「ささえあい（人は一人では生きていけない）」というテーマで、全校集会を開いた。ここでは東日本大震災の様子を映像で振り返り、2年4か月経過しても、30万人以上の



人（佐賀県人口の約3分の1）が避難生活を送っていることを知らせた。そして、次のような呼びかけをした。「震災から2年以上もたったので、『もう震災のことは忘れていく人が多くなっているのではないかな』と、いろんなところで心配されています。まだ、こんなにもたくさんの人が苦しんでいるのに。だから、今こそ被災地の人に、『あなたたちのことは忘れていませんよ。』『あなたたちは一人ではないですよ。』というメッセージを送ることができないかなと考えています。震災から2年以上たった今だからこそ、そのことはとても大切なことだと思っています。」この呼びかけに応え、4年生女子は、次のような感想を述べた。

「人は一人では生きていけないことがよくわかりました。ささえあうということも同じです。私たちは、ささえあってこれまで生きてきたから、今度は東日本大震災でつらい思いをした人たちを、私たちがささえないといけないと思いました。」

多くの子どもたちがこのような感想をもったので、この感想をもとにして、次の「しおりづくり」の活動に移っていった。

(2) 被災地の方へのメッセージ（しおりづくり） ……7月11日～17日

ア 活動の概要

少しでも被災地の方々の心が温かくなりほっとしてもらえるような、また、湊小とつながっていることを伝えられるような取り組みとしてどのような活動を行うかについて、児童・職員で話し合い、押し花のしおりなら私たちの思いが届くのではないかなと考え、全校でその作成に取り組んだ。

7月11日から17日までを作成週間と位置づけ、1年と6年、2年と5年、3年と4年でそれぞれペアを組み、ペア学年で実施した。ペアの下の学年が校区内で野草を摘み、その日のうちに級外の教師が、押し花作成器を使って乾燥させ押し花にしていった。次にペアの上の学



年が、それぞれの思いを胸に台紙に野草を貼りつけ、ラミネートをかけ、仕上げに紐通しをして完成させた。そのうちの6年生が作ったものは、石巻市立湊小学校へのお土産として持参し、残りは社会福祉協議会を通じて被災地へ送った。



イ 児童の様子や活動を振り返って

野草を摘んだ学年の子は、しおれないように、傷まないようにと気をつけながら、きれいな野草を摘んでいた。また、それを引き継いでしおり作成に臨んだ子供たちは、丁寧に野草を扱い、気持ちを込めながら台紙に貼りつけていた。

担任の事前指導等により、遠く離れた被災地への方々への思いを膨らませたり、今の被災地の現状を知って自分たちにできることを考えたり、人と人との支えあいの必要なことを再認識することができたのではないかと思われる。被災地訪問後の報告会において、訪問先の学校で喜んでもらったことを聞いて、子供たちの心も温かくなり、他人の役に立てたことの喜びを感じていた。また、海の近くに住んでいる自分たちにとっても「津波による被害」は他人ごとではないので、防災意識も高まったようだ。

(3) 東日本大震災被災地訪問

ア 被災地訪問の実際 …… 8月27日～29日（6年児童代表4名、引率教師2名）

(7) 訪問先 …… 石巻市社会福祉協議会 石巻市立湊小学校

（その他に、大川小学校、女川町、門脇小学校、日和山公園、石巻まちなか復興マルシェ）

(イ) 石巻社会福祉協議会での講話

職員の方からは、東日本大震災での被害の甚大さやボランティア活動の現状、復興に向けた取り組みの様子などを伺った。まず、ボランティア活動においては、自己満足で終わってほしくないという話があった。被災者（相手）の気持ちを十分に理解してほしいということである。また、復興に向けた取り組みが早いところは、地域のつながりが強いところだということを感じているということも強調された。「防災意識を支えるものは地域のつながりです。そのために今から皆さんができることは、地域の人に挨拶をすることじゃないかな。」というアドバイスをいただいた。このことについて訪問児童は、帰校してからの報告会で、次のような感想を述べた。

社協の方の話から、日頃から地域のつながりを大切にしておかなければいけないと感じました。また、ボランティアとして福岡から仙台に来られていたAさんという方とも話ができました。Aさんの言葉で印象に残ったことは、「かわいそうだからボランティアをしよう、と言葉で言いながら何も行動しないのは一番いけない。自分にできることからやっていくことが大事」というものです。自分が言った言葉には責任を持って最後まで行動しようと思いました。

(ウ) 石巻市立湊小学校6年生との交流学习

石巻の湊小学校との交流が実現したのは、震災直後に児童から「同じ名前の学校があります。励ましの手紙を書いていいですか。」という提案があり、本校から励ましのメッセージを送っていたからである。訪問前には、学校同士で何度も連絡を取り合い、交流の形態を何度も相談し合った。石巻の湊小学校からは、「震災の悲惨さには触れたくない。この子供たちは防災学習ならこれまで何度もやってきているから、そのことで意見を



交換するような交流学习ならできると思う。」という提案を受けた。そこで、本校の子どもたちが、唐津湊地区の拡大地図を準備していき、それを利用して唐津湊地区の防災マップを作り上げようということになった。事前に6年生同士での手紙の交換をし、互いを知り合ってから訪問としたので、交流学习は順調にスタートした。また、さすが石巻の子どもたちは、防災学習を積み重ねているだけあって、「ここには避難場所を示す看板があったらいいよ。」「避難場所はもう一か所決め



といたがいいよ。」「『物はいらぬはず逃げろ』という言葉は常に意識しておくこと」など、次々と意見を出してくれた。湊の子どもたちもいろんな質問をしながら、充実した交流学习となった。交流学习を終えた時に、訪問先の校長先生から次のような言葉をいただいたときには、本当に交流ができてよかったと思った。その言葉とは以下の内容である。

「この子たちは、これまでに被災者として様々な支援を受けてきました。優しい言葉をかけていただいたり、多くの支援物資をいただいたりです。そのことには感謝しますが、それらは全て受け身の姿勢でしかありませんでした。この子達は、今回初めて、自分たちが学んだこと、知っていることを、はるばる九州からやってきてくれた友だちに教えたんです。自分たちで一生懸命考え、受け身の姿勢を脱し、能動的に動いたんです。こんな姿を引き出していただきありがとうございます。」

このような言葉をいただき、ボランティア意識とは何か、本当に感じさせられた。相手に教えてもらうこともボランティア活動になったのだ。すなわち、互いが対等な立場で、寄り添い支え合う関係になったのだと思っている。

イ 被災地訪問の報告会

(7) 校内での報告会 …… 10月24日

授業参観日を利用し、全校児童、保護者を前に、交流学习で作上げた防災マップを説明したり、被災地を訪問しての感想や気づきを発表したりする報告会を実施した。

わたしたちは、1学期から石巻の6年生と手紙のやり取りをしていました。どんな6年生かな、友達になれるかなと想像しながら教室に入ると、みんな笑顔で迎えてくれました。(中略) 石巻の6年生だけでなく、宮城県の方々はとても明るく、笑顔で私たちにいろいろなことを教えてくれました。中には心の中に悲しみや傷をかかえている人もいます。けれど、みんな、わたしたちが思っているより、前向きに生活していこうと考えているんだなということを感じました。

そして最後には、次のような言葉で報告会を締めくくってくれた。「これからも石巻の湊小6年生とは交流が続きます。何かをしてあげるのではなく、おたがいに支え合うような交流を続けていきたいと思います。そして、このわたしたちの湊小にも『ささえあい』の気持ちを広めていきます。」

(この報告内容の詳細は、児童がプレゼンで紹介する。)



(4) 地域での報告会 …… 11月23日

訪問を終え、子どもたちの心の中には、「地域でのつながりを深めなければならない。」という意識がとても膨らんできた。そこで、公民館の文化祭の時に、地域の方を前にして、報告会を実施した。地域の人に防災について考えてもらうよい機会だということで、訪問児童4名は意欲的に取り組んだ。報告を聞いた地域の方の感想には、次のようなものがあった。

この湊と同じような地域（石巻）であったことを、映像で紹介してくれたので、本当に身近な出来事だと感じました。湊でも起こりうることですね。これから地域で防災訓練があれば、しっかりと参加したいです。ただ地域だけではこんなに真剣な防災訓練にはなりません。小学生がこんな風に地域を刺激してくれたら助かります。また、地域とつながっていききたいという気持ちがよくわかりました。何かの時は助け合っていきましょうね。

地域と合同で避難訓練を実施している本校にとっては、とても励ましになった。

Ⅲ 成果と課題

- 本事業での防災教育の取り組みは1年足らずであったが、本校においては防災教育を見直す良い機会をいただいた。取組の概要でも述べたように、今回の実践は本校での今までの取組を再点検し、それに工夫・改善を凝らしながらのものであった。そこで見えてきたことは、継続することの効果の大きさである。着衣泳においては4年目、地域と連携した防災避難訓練は3年目を迎えている。石巻への訪問においても同じである。2年半前、児童が被災地へ励ましのメッセージを送ってくれたことで、震災発生当時からつながりをもったからこそ実現したものであった。
- 着衣泳では、「背浮き」の技能が向上したのは確かである。児童は着衣泳教室にゆとりをもって参加した。その精神的なゆとりは、いざという時に必ず役に立つ。慌てずに自分で考えて行動する姿勢を示してくれている。ただ、このような余裕が、「もしもの時は命にかかわる！」という緊張感が薄れないようにしていかなければならない。
- 地震・津波避難訓練においては、避難場所での児童引き渡し訓練を行ったことで、保護者への「避難場所の周知」にも効果があった。これまで何度も避難場所周知の文書は配布したものの、「ここだったんですね。」と、今回初めて知ったという保護者もいた。実際に足を運んでもらうことの必要性を再認識した。また、非常用持ち出し袋を備えていたので、児童の保護者への引き渡しをスムーズに行うことができた。しかしその後の職員の反省では、「名簿が少し小さかったので名前を探すのに時間がかかった。用紙の表に児童氏名、兄弟姉妹の氏名、住所・電話番号を一度に記載していたが、表には児童氏名だけ、その他は裏に記載しても。」というような意見も出された。検討し改善につなげていく。
- 被災地訪問では貴重な体験をさせていただいた。中でも、交流学习の相手校から、「被災後は受け身だった子どもたちから、能動的な姿を引き出してきてくれてありがとう。」というような言葉をいただいたことでは、ボランティア活動というものは双方向の活動であるということをしかりと学び取らせていただいた。訪問した子どもたちも、励まそうとして訪問した石巻の子どもたちから反対に元気をもらい、そのことを十分に感じ取ってくれている。
- 石巻の社協の方から、「防災意識を支えるものは地域のつながりです。そのために今から皆さんができることは、地域の人に挨拶をすることじゃないかな。」という防災教育に関するアドバイスをいただいたことは、地域と連携しながらの防災教育に取り組んでいる本校にとっては励ましとなった。防災教育の充実に向けては、地域の人とのつながりをより一層深めていく必要がある。